「蝶の行方」

初めて見た彼女はアオスジアゲハのようだった。発色のよい濃い青地のブラウスには黄色と黒の小さな三角模様がランダムに散っている。

福田真美は通勤時に見かけた一人の女性から目が離せなかった。日差しを受けて煌めく青色のブラウスが、アゲハチョウの舞にもカナブンの翅の光沢にも見え、彼女は人間とは違う生き物のような気がしたのだ。真美はその二十代後半と思しき彼女のことを密かにアゲハと名付けた。

それから、真美は駅のホームでアゲハの姿を探すようになった。赤と黒、緑と赤、青と赤、昆虫のようにきわだった色の組合わせを自分の物として着こなすアゲハを真美はこっそり見つめて楽しんでいた。

真美は小学校の学童保育「ノビッコ」の指導員として働いている。児童の保護者からの理不尽な要求に気がふさぐこともあるが、そういう時はノビッコの教室の片隅にある飼育ケースをのぞき込む。そこには、黄緑色と黒の縞模様のキアゲハの幼虫がいて、呑気にパセリの葉をむさぼっている。その姿を眺めていると心が和むのだ。真美は昔から昆虫が好きだった。しゃべらないところ、言葉の代わりに与えられたかのような個性的な色合いをしているところが気に入っていた。

気苦労の多い職場ではあるが、同じく昆虫好きな恭太朗や甘えっ子の菜波などの児童たちに囲まれて、真美はつつがなくノビッコで働いていた。

ある朝、真美は電車の中でアゲハの緑色のスカートにカマキリがくっついているのに気が付く。彼女も周りの乗客も身動きができずにいる中で、真美はそのカマキリを平然と掴むと、電車を降りる。翌日、電車で再会したアゲハは虫が嫌いなことを滔々としゃべり、その熱量に驚く。真美はしゃべるアゲハよりアゲハの服装に好感を抱くのだった。

十月の土曜日の午後、ノビッコの児童九人と真美を含めた指導員三人は散歩がてらに近所の寺院にやって来た。寺院の敷地内の広場で遊んだり虫取りしたりハイキングコースを散策したりするうちに菜波が行方不明になる。

真美は必死に菜波を探す。何かあれば責任を取って九年間続けてきた指導員を辞めなければならない。そんな真美の胸に去来するのは、社会人になっても同僚とうまく関係を築けず、転職を繰り返す中、幼い甥の海里の世話することで子供への愛しさ慈しみを知り学童保育の指導員を目指した過去であった。

そこへ、菜波探しの増援として現れたのはアゲハだった。彼女は菜波の叔母に当たるのだと言い、真美のことをカマキリさんと呼ぶ。

夕暮れに染まる広場の草むらの中で菜波を見つけた真美とアゲハ。菜波はカマキリを捕まえたくて敷地内を動きまわっていたらしい。泣いて謝る菜波を抱きしめる真美の心に熱いものが込み上げていた。

だが、ノビッコに戻った真美を待ち受けていたのは菜波の母親の不満そうな顔だった。真美は自分が指導員の役目を果たせなかったことを悟り、消沈しながら夜道を帰途につく。

突然、暗闇の中からアゲハが出てきて強引に真美をどこかへと引き連れていく。たどり着いた先はラブホテルだった。アゲハは有無を言わさず真美をその一室に引っ張り込む。

その部屋の壁一面にサイケデリックで極彩色な蝶のイラストが描かれていた。圧倒されて立ち尽くす真美に、ここはアゲハが仕事で内装のデザインを担当した部屋で、虫好きの真美に見てもらいたかったと語る。そして、「あたしのこと好きですよね」と真美に迫る。

真美は「私は、あなたじゃなくて、あなたの服が好きなの」と告白する。アゲハの服の色合いが昆虫の神秘的な色彩に似てとても素敵なのだと興奮して話す真美に、アゲハは着ている青色のブラウスを脱いで真美に渡す。「そんなに気に入ってるなら、自分が着てみたらいいじゃん」

真美はそのブラウスを体に当てて鏡を見るが、ちぐはぐで滑稽にしか見えない。服だけ見てもそれはただの布でしかなかった。

「あなたの方が似合ってる。ちゃんと着て」

真美はアゲハがブラウスを着ていく様子を見つめる。無機質な青い布は体のラインに沿って艶めき、ただの女だったアゲハが一羽の蝶に見えた。青い蝶は真美の方に伸びあがると唇にそっと触れた。真美の体に甘い感覚が広がる。

しばらくして、真美はアゲハの唇を受け入れたことに愕然とするが、アゲハは「いつかは服がないあたしのことも見てもらえるようガンバります」としゃべり続けるのだった。

それから数日後、学校の校庭では学童保育ノビッコの信用を回復しようと意を決する真美の姿があった。